

■初版第1刷をお持ちの方

頁・箇所	誤	正
P12 サイドノート	(追加)	MEMO 重心の計算式のポイント <ul style="list-style-type: none"> ・体節に分ける(図1では5つの体節). ・各体節の質量の和を分母, 各体節の質量と質量中心の積の和を分子とし, 求めている. ・図1では二次元の平面上の重心であるため, x, yそれぞれ計算して求めた. ・三次元ではx, y, zでそれぞれ計算する.
P16 サイドノート	MEMO 床反力はx軸方向の <u>前後</u> 分力, y軸方向の <u>側方</u> (左右) 分力,	MEMO 床反力はx軸方向の <u>側方</u> (左右) 分力, y軸方向の <u>前後</u> 分力,
P17 上から8行目	<u>その結果右床反力ベクトルと左床反力ベクトルが生じているため, 床反力計が2台あれば左右別々に測定できる.</u>	床反力計が2台あれば、左右床反力ベクトルを
P17 サイドノート	MEMO 摩擦力 (force of friction) 物体が他の物体と摩擦しながら運動しようとするとき接触面からはたらく面に沿った抵抗力をいう.	(P18 サイドノート1行目へ移動) MEMO 摩擦力 (frictional force) 物体が他の物体と摩擦しながら運動しようとするとき(静止摩擦), または運動しているとき(運動摩擦), 接触面からはたらく面に沿った抵抗力をいう.
P28 サイドノート 上から11行目	37.4%の位置となる.	37.4%の位置におおよそ近似する(体幹が屈曲位となっているので実際にはもう少し下方になる).
P28 サイドノート 下から6行目	体幹に対し軽い遠位部の <u>上肢</u> が近位部に近づく運動を行うが,	体幹に対し軽い遠位の <u>体節</u> が近位部に近づく運動を行うが,
P30 上から7行目	速度をさらに微分すると加速度になる.	速度をさらに時間 Δt で微分すると加速度になる.
P30 上から8行目	2) 積分 では、話を元に戻して、移動距離は、 距離=速度×時間 で求められる。たとえば1.50秒のときの速度は6.75m/秒で、0.01秒に進む距離は	2) 積分 積分は微分の逆演算である。したがって、加速度を積分すれば速度を、速度を積分すれば変位を求められる(図9)。図8のある区間(ここでは時間帯)の加速度を積分すると、同区間の傾きが6となるような速度が求めら

	<p>6.75m/秒×0.01 秒=0.0675m</p> <p>であり、次の 1.51 秒のときの速度は 6.8403m/秒で、0.01 秒に進む距離は</p> <p>6.8403m/秒×0.01 秒=0.068403m</p> <p>である。</p> <p>このようにしてある区間の 0.01 秒ごとに進む距離を求めて加算していくと、その区間の変位を求めることとなり、それは棒グラフの面積となる。これが積分である。つまり速度を時間で積分すれば変位が求められる。同様に加速度を積分すれば速度が求められるのである (図 9)。</p>	<p>れ (図 7)、同区間の速度を積分すれば同区間の変位を求めることができる (図 4)。</p>
P38 サイドノート 下から 4 行目	10 歳ごろから車椅子中心の生活となることに伴い、	10 歳ごろから座位中心の生活となることに伴い、
P44 サイドノート 下から 6 行目	さらに、両下肢をまっすぐにするための	さらに、両下肢を伸展するための
P45 上から 10 行目	股関節を支点として、 <u>体幹の方向 (反時計回り)</u> の回転モーメントと下肢の重み (時計回り) の回転モーメントを比較した場合に、	股関節を支点として、 <u>上体の重みによる</u> 回転モーメント (反時計回り) と下肢の重みによる回転モーメント (時計回り) を比較した場合に、
P45 下から 4 行目	また、 <u>体幹の方向 (反時計回り)</u> の回転モーメントと下肢の重み (時計回り) の回転モーメントを比較した場合、	また、 <u>上体の重みを利用した</u> 回転モーメント (反時計回り) と下肢の重みを利用した回転モーメント (時計回り) を比較した場合、
P46 上から 7 行目	重り負荷が <u>体幹の後方</u> への回転を抑制するよう作用する。このように、重りなどで重心の位置を	重り負荷が <u>反時計回り</u> の回転を抑制するよう作用する。このように、重りなどで合成重心の位置を
P46 上から 5 行目	股関節屈筋の張力によって <u>体幹</u> が前方に回転するためのモーメントをつくり出している。	股関節屈筋の張力によって <u>上体</u> が前方に回転するためのモーメントをつくり出している。
P52 下から 1 行目	<u>台などの支持物で非麻痺側上肢の支持をしながら行う</u> とよい。	<u>座卓などの支持物を利用して立ち上がる</u> とよい。
P58 サイドノート	初期接地(initial contact) 荷重応答期(loading response) 立脚中期(mid stance) 立脚終期(terminal stance)	初期接地(IC initial contact) 荷重応答期(LR loading response) 立脚中期(MSt mid stance) 立脚終期(TSt terminal stance)

	前遊脚期(preswing) 遊脚初期(initial swing) 遊脚中期(mid swing) 遊脚終期(terminal swing)	前遊脚期(PSw preswing) 遊脚初期(ISw initial swing) 遊脚中期(MSw mid swing) 遊脚終期(TSw terminal swing)
P59 下から 10 行目	把握することができる。 <u>なお</u> 、下肢関節角度や下肢関節モーメントを	把握することができる。 なお、 ここでは 下肢関節角度や下肢関節モーメントを
P60 上から 2 行目	遊脚期で下肢を前へ振り出すために大きく屈曲位から伸展するので2回屈伸する(二重膝作用)。	遊脚期で下肢を前へ振り出すために大きく屈曲した 後 、初期接地に向けて伸展するので2回屈伸する(二重膝作用)。
P62 下から 9 行目	歩幅では男性のほうが、歩行率では女性のほうがその傾向が強まる	歩幅では男性 で 、歩行率では女性 で その傾向が強まる
P63 上から 3 行目	<u>I 期</u> より大きな膝関節伸展筋力が必要となることがわかる	この時期 により大きな膝関節伸展筋力が必要となることがわかる
P64 サイドノート 6 行目	(追加)	MEMO 歩容認証 個別的歩容の特徴を利用し、歩行時のアライメントや動きの特徴を解析して個人を認証する技術をいう。
P65 上から 3 行目	(講義の図 14 参照)	(講義の 図 14b 参照)
P183 右段下から 6 行目	<u>ISw, PSw</u>	PSw, ISw
P184 上から 6 行目	SLS	SLS (single limb support)
P185 下から 4 行目	<u>RLANRC</u>	ランチョ・ロス・アミーゴ国立リハビリテーションセンター